

# 星蝕詠嘆集

Eclipse Arioso

【Second Edition】

中田満帆

a missing person's press

2023

装丁——著者自装

片足は墓穴にありてわれは立つ——**BWV156**

星蝕詠嘆集／Eclipse Arioso 【Second Edition】 中田滿帆歌集

星蝕詠嘆集／Eclipse Arioso【Second Edition】

春＊  
7

夏＊  
30

秋＊  
61

冬＊  
89

跋＊  
121

寺  
山  
修  
司  
へ  
捧  
ぐ

春

野兎のように兎ら去るしぐれより隠しに寂し手はみずからの

午睡ひるねするぼくの意識に落ちてきて風にふるえる野苺の果は

春畠にたったひとりのほほえみを浮かべておれを誘うマネキン

拒まれてゐるでもなしに鴉見てわれもひとりというほかはなし

夜間飛行いちまひきりの板ガムでわれは飛ばさん空しさなどを

友だちはみどりのからすまひるとき孤独に落ちて鳴きもせずゐる

バナナ積む港湾業務・海はまだ春に馴染んでゐないよう

裏階段展びてゆけゆけ入れ眼なる緑の犬のまなこのなかに

眠らない木々のようにはいられないダンス、ダンス、ラジオに合わせ

喪えるものみなとるにたりはせぬ・白菜の虫など殺すひととき

愛などにあこがれたまま頓死するのがせいぜいだろうと青葱を切る

きみにとりなにを意味するものがあるう情けのつゆもないまなざしで

やまびこの不在零狼かけぬけて登山家一同みな喉を喰わるる

銀河にてさまよう塵を日の本と呼びみかどらの車スピードをあぐる

人狼の夜話を聴きつつ眠りたる架空の息子の羅針盤かな

姉妹みな葬りたくて断崖の彼方の星を撃ち落とす夢

家族欲す憐れなるわが魂しいの救われざるを月に見るかな

亡命の猫いっぴきに餌をやり詩行ふたたびわれに息づく

戯れに魚の頭落としたる猫の営む理髪店にて

光降る貧窮院の壁に凭れ酒という死を呑みつづけるかな

ソーダ水の残りの滴はちばちとしてコップのなかの犀眼を醒ます

それがぜんぶだったんでしょうか、からっぽの郵便受けに水

小さな花きいろい花が咲きましたら惜しみなく千切れ惜しみなく奪え

もうじき晴れるという報せ来て河床に素足を入れる、ほらこれがきみの羊水か

花狂いするものはみな射たれよといっぱいの水に潜るひとりあり

時来れば耳鼻科通院終え遂におれも成人死者のレースを

わからない、っていう顔して、もどりみちもはや見えない春霞濃く

濡れそぼつ聖母のごとき裸婦像やわれを見初めて連れてゆかんか

パツチェンの詩集をひらく午后の陽に啓示されるものあらずや

待ちながらみずからをふと省みてバスは来たらずさつき光れり

かげろうの歌ひとり聴くひねもすにたれかを欲すこともなきまま

時というときはざまで揺れているモーターの灯よぼくにたなびけ

喰われたる虹鱒ひとつ漁火を両の眼に焼きつけたりぬ

虚構にて森番たりしわが手斧みずからをまたうつし世へ還さん

水のないプールのごとくからっぽの水槽抱いて少年泣きぬ

乾く蓮 葬場の果てに生えておりわれ昏昏としてそを見つむ

陽ざかりにシロツメ草を摘めばただ少女のような偽りを為す

ぬかるみに棲むごと手足汚してはきみの背中を眼で追うばかり

いくばくを生きんかひとり抗いてかぜの壁蹴るかもめの質問

うごくもの　うごかないものにはさまれてきょうも飛べないみどりの男

草の葉のなまえを調べ図書館の暗がりはいまぼくのものなり

さまよいのものから見あげる窓はみなひとでないものにこそふさわしい燈しがある

きのうがまたきょうのふりをして歩いて来る・なんだよおまえ地平線に帰れ

花野にてふさわしい死を死にたいといい散水機が暴走したり

天使来る滅びのときの滴りに翅で描いた未知のよろこび

手相見の皺の多さよ希望線反抗線の尽きるところまで深く

石を探す石を探す石を探すさりとして埒もない河原の真午

ゆうぐれにきみのおもざし揺れるときふとあたらしい犯意見いだす

別れにも涙流れず悲しさをひとり尿して路上に託す

蝶死せるいっぽん道の彼方にてだれが殺したとつぶやくやさしさ

でもそれがまちがいだなんていわないよ午前一時の脱走劇にて

まだ知らない、濡れた唇、雨模様、下の句のない男の俳句

みどりさえ危うくなりぬ五月病咳きのなかにすべて失わば

そばにゐることなんかできもしないのにただもういちどだけ花に触れ

光りさすなか一輪を剪りに来て茎もてあます朝餉のあとは

鴉飛ぶ姿は孤独をおもわすと呟いておりわが妹は

進入禁止の路次また路次よ葬式に遅れてひとりギンズバード暗唱す

きみがゐた給水塔の真下には壁面塗装用の足場ばかり

雨がいま暗渠を走る・もういいよ・きみが話してくれてゐたから

なぜだろう・どうしてだろう・仮面売る男はいまも素顔のまんま

草のような花のようなまぶたのうえになぶくものに手をふる

修司忌やさつきのみどり燃ゆるまで灰になるまで書物を捲る

葡萄を量る女たちには戒めのような両の眼泳ぎつづける

花曇る停留所よまちがえてひとつ手まえで降りる少年

夕なぎに身を解きつつむなしさを蹴りあげ語る永久のこと

いずれ去る春のねぐらでわが街の再開発の告知をやぶる

夏

唇<sup>くち</sup>ちを噤<sup>く</sup>む——きみのためにできるのはそれだけと識<sup>し</sup>るこの夏祭

ともすれば腿も危ういスカートの妹の肩に飛蝗あをあを

列車には男の匂い充ちたれて雨季も来たれり新神戸の町

ぬばたまの夜をレールが展<sup>の</sup>びゆきてしずかに充たすわが青年期

小雨降る道路改修工事にて少女誘拐われは聞くのみ

青林檎焼きながらふとおもえり遠き姉妹の婚姻なぞを

たくさんの傘の行進見おろせば濡れるまま立つ歩道橋にて

「くちびるの厚ければ情も篤し」老ゲイ・ボーイのまなざしやさし

降られつつレインコートを展ひろげれば羽に見立てて落ちてゆくわれ

だからなんだ、桃のような月のかげに口腔の血がうずくなんて

黙ったまま他者にまみれて検品のアボガドの色どれもすすしい

みながみな幸福だった験しなくきょうまた猪色の列車にゆらる

だんだんとスピードを増し9階の階段裏で消える潮騒

ソーダ水の壺の雫に過ぎゆきし少年の日の汗をおもいぬ

暗殺の夜々ひとり待ってゐるおまえが来るといふ手なぐさみなど

どうかまたあのうそを吐いてくださいと告げるきみに取り憑かれ

たとえば草のように花のようにゆれてみたい傘ならきみが持てばいいから

時が鐘を鳴らす教会の尖塔に鳥がとまり雲はるか港を流れる

ひざかりに点々とする血のしずくだれにも繋がれないということ

花かすみ病かすみのなかでいま身をひらかれるひまわりの種

もう起きあがることもできません・えいえんを着た馬が視てゐる

水中めがねなくしちゃったよぼくはもう男の子にはなれないかもね

星にさえ追いつかれて観望の子供のひとりおれを笑った

かれのみの秘密を欲しほる穴に埋めるものなし森は明けゆく

なにもものも欲せず夏を一過する貨物列車に身を委ねたき

あじさいがゆれるゆれるまたゆれてやさしさなどをあざけりゆれる

海という一語のために汲まれてはあわれしづかなる7月の桶

朝どきにれもんの一果撫づゆびのあいだ零るる無名の息づき

つぐなえることもなきまま生ることを恥ぢ草色の列へ赴く

神に似し虹鱒捌くはらわたに出産以前のかがやきばかり

うちなる野を駈けて帰らん夏の陽に照らさるるただ恋しいものら

素裸のれいなおもいし少年のわれは両手に布ひるがえす

水鉄砲撃ちつくしたり裏庭を駈けて帰らぬ幼年の業

ドラムセットくずれつつあり客席の少女のひとり高くジャンプす

翻るワンピースや物干しの彼方に失せる数千のきみ

ひとのなき青森県の三沢にてふと雨さえも言語足り得んや

ほどかれた靴紐みたく細長の柩のなかに収める両の手

ひとがみなかけを残して去ってゆく気づけばいま人工降雨実験なり

叢<sup>むらさめ</sup>雨の降るはせつなよ燃えあぐる模型飛行機路上に融けて

踏む水のおもに浮かべる月だれか愛しいものをぼくにわけなさい

残されてまだここにゐるという意味を笑うみたいに雨は過ぎ去る

告げるには遅いおもいのなかで拭うもの・たとえば薄い胸板の汗

雨降れるひと日は室<sup>へや</sup>の暗がりにならすのコップのみが美し

けものすらやさしい夜よみずからを苛みながらも果実は青い

まだ解けぬ方程式も夕暮れてきみのなまえのなかに眠れる

曇天に滲む光りの粒遙か浸透しているきみのまなこに

かりそめの顔なやバナナ・ケース積むわれはだれかとおもういちじつ

つぐないは5月のみどりたずさえて夜の戸口へおいてゆくこと

指切りのつもりもあらずちぎりという一語のなかに解かれる夕べ

ひとがまたぼくに質問するなぜか答えたくないポールの表紙絵

日本語の律いっせいに狂いたる夏の匂いの向日葵畑

らしさなどなくてただひとりの男として草地のぎりぎりに立つ

さかあがる星月淋しむくいとは幼きうちに死を悟ること

漁火をたったひとりの友と云い海路の果ての幸福求む

彎曲する水・沈黙する水・したたかにひとを攫って閉じ込める水

どうやってきみが帰って来るのかを古語辞典のなかに見つける

呼び声がする・遠い森のむこうから、なずきのなかをくすぐるだれか

子供抱きながら傘を差す一瞬のひらめきに口をあける子よ

駈けてゆく足あざやかに光り充ち水あかり発つびしよ濡れアリスちゃん

みずたまりのむこうからうつむいて歩いて来るはさなえの亡霊

夏の匂いするがらす戸のむこうへ歩く歩く水のかたまり

けふれるような胸持つ男青春というものをあらかじめ失ってるて

なにもかも交換できてしまうからせめてあなたをうたぐってるたい

波打ってくずれるひとよ鶏肉のような色して死んでしまえよ

かのひとの素膚のうえの棘みたく存りたいと願うも夢は終わり

しめ鯖のすっぱい真夏くりかえす正午に於けるぼくの対処は

ひとしれず放下の果てを死ぬべきと黄色くなったセロリの葉っぱ

麦畑のうちなる誘い墓場にて見知らぬ友のふたつの乳房

どういふこともなかれど声を断つ回転木馬の馬たちはいま

天下原のきぬずれひとつまたひとつ水となり顔を打つ未明まで

鴟らの問いを静かに聴きながら波の答えに飛び込む隣人

ひとつでもいいからと云ってすがりつく火ぶくれた指の愛もある

やめてくれ——ぼくを慰めようとしてゆうこ求める脳なみずきの襞よ

黒死病患者のごとく嘴をかせにさからいあげるからすは

たがために花を剪らんか一輪を求めさ迷い荒れ野に消ゆる

ずぶぬれてゆこうか犬の心臓のような港湾都市を求めて

水吃る排水の管ねじれ死に聞える地下のうたごえなんか

夜の鰯捌かれながらいまいちど漁り火に乾いたまなこ見ひらく

いたずらにさみしいともいえず熟れる芽のなかにそっと手をやる

**HAPPY END!!!** 叫びつつあり海辺にてもっとも黒い波を求むる

繫留船よりコンテナ降ろされるぼくのうかがわを嘗めるように

暗がりにもういちど入りたくおもうのは銀塩写真のせいか

ときとてときのなかのたくらみにあらがえないのがかわいい

愛すらも懐かしむのみ　つかのまの人生という盤面の疵

それでなおかの女はぼくを赦さない花の一輪剪って葬る

忘れられたひとびとにゆっくり同化する銅貨みたいな鈍い輝き

懐おもいだせずにあるなぜ懐おもいだそいうとするのかもわからない犬

前科者ロックンローラー人夫だし検品係あしたの愁い

夜を流れる雲の赴くところまでまわりつづけて観覧車現る

耳を閉じる――ぼくのためにできるのはこれだけとおもう舟あかり

秋

すべては見せかけだろうか崩落する宵待草反転する花と美人画

きみへの道すがら死んでしまったものたちを弔いたいけど茶器がない

おれが死に銀河の西へゆくと聞き腹を立ててる母のまぼろし

月の夜のゴンドラゆれるまだわずか魂しいらしいものを見つけて

うつし世にもはやこがれるひともなく黒帽子の埃を払う

寂しさは茎のふくらみ触るるもの近づくものみなどこか拒みて

感傷にふけるわけでもないけれどわたしは過古をアカシアと呼ぶ

たなそこにわれはまさぐる莖たれか泣かしてみたくなればふくらむ

たわむれに古帽を叩きつけてはかりそめの野性を謳う男歌かな

うら若き戒めのなか立ち止まるたとえば石を見るひとのまえ

わが知らぬ土地にてゆかこ老いたれる夜汽車のごときひとの生かな

秋風やひとより遅く学ぶゆえわれひとりのみ労役となりぬ

少しでも幸せであればいいのだと水切りをするぼくらの時間

外套のボタン喪う日も暮れるいつたいぼくがなにをしたんだ

砂糖菓子降る町ありや陸橋を過ぐるときふと考えており

干割れたる道の果てにて蟻歩く北半球の地図を抱えて

生田川上流に秋を読みただ雨を聴く水に宿れる永久ということ

まだ生きる蚊の一匹がわれを追いふと恥ずかしい秋そのものが

なにをしてゐるのかぼくの隠しより少し分けようきみに孤立を

ひとひらの地図もつ彼女らの明日をぼくはやぶいて通り過ぎるよ

喪失の都市に奪われゆきひとりルンペンとなるはたちのわれ

吹かれつつ地下のくらがりさ迷って拳闘士のような男われ視る

発車音警笛排気まぎれつつ見るべきものを見ているひとり

よそものの視界のなかをゆき交えば角まがるたびちがつてゐる顔

真夜中はどろぼうたちの靴おとにこころ癒して路上へ眠れ

はぐれながら歩むということ一輪の花の高さを飛び越える度

長き夢もらせんの果てに終わりたる階段ひとつ遅れあがれば

かのひとのうちなる野火に焼かれたき手紙のあまた夜へ棄て来て

3階の窓より小雨眺めつつ世界にひとり尿<sup>しと</sup>まりており

妹らの責めるまなじり背けつつわれは示さん花の不在を

ぼくという一人称をきらうゆえ伐られた枇杷とともに焼かれん

ひとひとり殺して帰えるひともなくふかき斜面に家は明るむ

ことばもてわかつものなき家なぞも急坂のうえきようも明るく

古電球踏みつけて妬心去るのを待つもういいだらうさらばさらばだ

かみそりの匂いにひとり紛れんと午後訪れぬ床屋の光り

くやしさを飼い殺すなり灯火のもっとも昏いところみあぐる

やまぶきの光りのなかをしとやかなけもののようなきみの黒髪

睦むとききみが乳房や黒髪に寢息を発てるぼくという他者<sup>（ひと）</sup>

拾われて手帖の頁繰ればただかすみかすかなインキで——「絶つ」

過古という国よたそがれ密航し少年のまま老いは来たりぬ

もはやかつてのことなどどうだっていい西半球へと歩きつづける

やがて産まるるわが児のために古き老木いっぽんを盗む

また帰途を見失えりただひとりゆくなら黄葉の化身とともにして

それは深いまなざしをしてぼくを見ているいっぴきの猫のようなひとのようなの

ゆうぐれは烈しいまなこ・おもざしをゆさぶるきみのぶらんこ

ほどかれるサーカステント夜のうち飛びたつために裾をひらめく

鳥籠にセルロイドの鳥を飼うかつてのぼくを取りもどすため

煙突のけむりのうえを遊んでる月いっぴきの青い晩秋

波果つるつかのま風のなかに存り灯台守の飛べる音聴く

きみのない夜ふけの廚 麴麴を焼く竈のなかの熾きはまぼろし

日本語の孤愁へひとり残されて犀星の詩を口遊くちずさむのみ

唾するわがふるさとの地平にて溶接棒の光りは眩し

たかみより種子蒔くひとよ地平にてあわれみなきものすべて滅びよ

失せばいい はらからどもの彼方より熾きへ向かつて歩むばくらは

空腹の長い午后にて牛脂嘗めきずぐちのない傷みを癒す

ひとの世を去ることついできずただ口遊めるのはただの麦畑

おお夕餉小皿すれあう音もなくわれはひとりの夜に暮れゆく

すれちがうことのすきまをとほりぬけまひるをわかつ郵便人夫

冬用のジャケットぼくは持たないから恥ずかしく秋にとどまるつもり

砂の目をしながら歩むさまよいにわれまた砂のようにまぎれて

空いちまい空腹ゆえに切り落としテレビ画面の孤児ら喰う

たが母も血より淋しきもの通いかつてからすのからかいに泣く

黙するは一語の和解なきままに朽ちて腐るるわが家の窓だ

心臓のような柘榴の実を嚙り幼きときのみずからを抱く

語られることもなかりき物語の標本となるぼくの余生は

枯れし河 測量人の蹠音を石が呑みまた朝靄が呑む

冬瓜のあばらに雨の垂れるままわたしなるものわずかに忘る

星月夜 きみの夢へと訪れていつまでもただ手をふっていたい

両の手をひろげてひとり擬態する秋に染まるる地平線あり

午後の陽のなかで妬心はふくれたるたとえばかつてのゆうじんの家

ひとりのみかぜにまぎれて消えゆかんことばのわれよ詩のたそがれよ

砕かれて猶土に還れず散らばるる浴室タイルの水色を視る

赤インゲンの罐づめひとつ転がして休日  
の陽の明きを憾む

夜が降る9月は遊ぶひとりのみ  
遊具を跨ぐとうめいな秋

殺意さえおもいでならん河下  
の鉄砲岩に拳を当てる

フェンスにて眠るものありカメラ持つわれに気づいて走る野禽は

犬の死に捧ぐる花もないままに過ぎ去るばかり雨の初秋は

愛を知らずわれはひそかに奪いゆく手のひらのなかの秋草をまた

ふたたびという辞のひびきもはやなく檻のなかにて坐るゆうぐれ

旅に病める芭蕉のあまた秋霖はかつてのわれを連れ去り給う

駈けてゆく女の子たちかな秋の日の選挙ポスターいちまいやぶる

冬

ひとの名を忘るしもつき机上にてミニカーいちだい消息を絶つ

トマト罐放ちつつあり琺瑯の鍋につぶやくかつての片恋

分光器かざして見つむきみがゐた町のむこうの山の頂き

青む眼の一羽が鳴らす鉄の檻ぼくは外套着て匿うさ

そらというものの対義語探したる少女のせつなぽっかり暮れる

しんしんしん 町を踏みしめながら肺透きとおるまで走る暁

冬ざくらわずかに咲くは生田川並木のなかにひとり見つける

時も風ぐ夜更けの海を眺めやる一人称を棄て去りながら

地上にて生きるせつなをひとり食む黒葡萄の眠りうたあり

ひと知れず生きたいなどとおもいたる広告塔の焼け落ちるなか

なまえすら棄てられるなら三畳の女郎部屋にてかすみを見たい

素裸のままに厩の主となる仔牛の胸に暖を取りつつ

灯しては病後のわれを蔑すのみ夜間巡回の看護婦の脚

告白の虚構性にて成るものを買いためて自己という旅

そしてみな自由あれよと願いてもまだ腥きわれの水槽

古帽のなかにて眠る猫いまだ勝ち得ぬことを慰みしかな

ひめるものもはやなきゆえ葭火のいちばん昏い色を散らせよ

われを憎む妹たちの夕月を洗面器にて保存し眺む

犬を抱くようななぐさみ多かつたりゆかこのゐない町が暮れゆく

葡萄の木枯れながら蔦壁を這いわれのかげにて実る黒さよ

師走にてひとりの友を葬りし夢を見るわが旅枕かな

冬の根を掘るわれいまだ男という容れものにただ弄ばるる

愛語なく昏くなりたる室もはや孤独に甘えられずおり

朝の田に一羽のからす落ちておりひとりの友のごと葬れり

倦めばただ天井見つめひとときの虚ろのなかをさ迷いぬかな

うなだるるわが天金の書啓くたび架空の訓示受け入れ給う

死との間を洗う行為が人生と云い回廊去る清掃夫たち

（寂滅は叶わぬものよ）老医師の昏き鏡に浮かぶ待合

たずねびと色失いつつ貼られては消えて久しいきみあり

保安所の不在は窓にあらわれてやすらぐだろう警報ランプ

村あかりあかりは遠くとおくにて野良の眸は裸のあかり

追うのみにきみは生きてる道はぐれ不在に灯もる車内ランプも

おまえをなぎ倒せばどれだけ救われるだろう砂場を充たせ悲しい歯痛

戻らないかれらのために開かれて廊のおわりに立つ非常口

ふたたび——はないだろうはなれていくみずからを壁のざらめきに打ちつけても

友情を知らぬひとりの顔さえもとつぷり暮れる洗面器かな

愚者たるに樂園あらず運河にて孤舟の櫂をゆらす星曆

鳥語のみ教授し給う人類学者人語の解読いまだならんか

冬の蟻よじ登りたりもの干しの子供の靴にむくろとなりぬ

抽撰器しわすの町に運ばれて運命以前の籤の悪名

銀匂うくわるとつと手に歩く松本隆の生き霊を見ん

うしろ髪なびくかの女のまぼろしを花色として素描せしかな

うすわらうひとらの若きかげなるを唾棄してなんぞ復讐足りえず

あまねくを荒れ野に譬え歩みゆくもはやかのひとを呼ぶ声もなし

ねこやなぎ2月のぼくのまぼろしにきみの再誕として芽吹く

名を持たぬコンクリートの塊が悲しむような岸壁の時化

老犬の檻ばかりなる家々の女主人らだれも顔なく

屠られるものの匂い週末のステーキハウスの光りまぶしく

浴槽に水のない日よ遠ざかる母の亡霊しばらくおもう

冬の菜をきみに贈りたし経験と呼べるものなきわが愛のため

冬の日に蜆を買ってひとりのみ時計じかけの月を見上げる

霧笛鳴る神戸の港不眠症長距離走者ひとり過ぎ去る

**I wanna be with** 繰り返して猶答えでず海のむこうへ飛ぶゆかこかたち哉

菟火をふかす月夜に神という神に下れる人流の罰

法医学教授するひと人体のなかに眠れる口唇期かな

土塊に過ぎぬわれらと唱えたる基督信徒の外套の艶

リングイネ茹でる午後の陽かたむいて生田川へとぶつかるあいま

なみだという一語の対義求めつつひざかりに子供靴ひとつあって

両の手をうずめて冬の果てを識るもてないおとこたちのうた

流民との交信中なりゆびさを幾千まえの座標に合わせ

主人公不在のままに幕を閉ず栄光という二字の引力

別離への餞<sup>はなむけ</sup>たればいちまいの債務証書をきみに送らん

砂漠とは渴く魂しい砂色の女がひとり佇んでゐる

椿とは女の化身惑星を滅ぼしながら旅をつづける

ナスガママ、アルガママにてユニゾンする偶然のしたたかな飴

天体をかすめて落ちる衛星の望郷にみな焼かれてしまえ

汗の染む放浪詩篇　かのひとの跡へむかってうち棄てたりぬ

枕木を数えて歩む帰り道充ちたりたれるわたしの列車

屠らるる敗馬のうちの光りたれまなこの奥の少年のぼく

通行止めのバーがたがいを遠ざける花のかげなどない公園通り

たったいま愉樂を知らずうたたねる港の杭にとどまれる鳥

立ちどまる猫や光りの一滴を夜のうちなるやさしさにして

凍てる星ひろげる両手天体を抱きしめんとす子供らの夜

神を説くひとのかげあり遡るきみの知らない男の降臨

去ってしまったかれらかの女らのことを記号に変えてばらまく夜

いつまでも青傘のなかでかくれんぼしてるふたりの猫が

ひとりのみ隠れ蓑のかげがある雨の降る港その端にゐて

子供らの駈け去るかげが差していま枯葉の色素落ちてゐたりぬ

もう春がまるで近くにあるようでふと立ちあがる軽量係

それまでとおもいながらか雪の跡 手袋だけが手をふってる

雲果つる夜の頭上に閃いてきみの指までつづく天体

老木のごとき時間を過したる夕暮れまえのぼくのためらい

中也ごとマント掛けたる冬をいま鏡のむこうに見て風車

月光を遮りながら去るバスの無人のあとにわれゆく路よ

中年になりぬるわれよ地平にて愛語のすべてふと見失う

墓地過ぐるひととき雪の反射にて子供の墓碑へ光りおりたり

ぼくたちのまだやはらかなうちがわにきみらしい棘をひとつ捧げて

眠る冬知らない土地をふかぶかと踏み歩みゆくような犬のまなざし

晩年についてぼくが考えたことたとえば山羊のやわらかさとか

トム・ヴァーレーンみたいにギター弾きたいっていう女の子ゐた

エラスムス不在のうちに現れて神を説かれる淋しい寒帯

門の黙するままに閉じられて箒のかけにすがる木枯らし

発つ霧へふいにマッチをかざしたるわれは猪<sup>い</sup>圈<sup>こく</sup>のひとも知れず

## 跋

この歌集のオリジナルをだしてから、それを苦々しくおもっていた。あまりに自作について甘く、厳しさがなかったことをだ。今回、改訂版をだすにあたって40ページちかく削った。いまのわたしにとってほんとうに必要な、ほんとうに読んで欲しい歌に限定した。懐古趣味的な歌、イメージがあきらかでない歌、自己主張のような歌などを省いた。この本がこういった評価を受けるかはともかく、あれから4年経ってより自覚的に詠むようになったわたしが撰んだのが今作である。いくつか語法的なまちがいを解消した歌もある。下の句だけを直した歌もある。だが、けっきよくは消すことも直すこともできないまま、かつての哀傷といったもののためにそのままにした歌もある。オリジナルについて角川『短歌』紙上にて寸評をくださった福士りか氏ほか、読んでくださった、好感を持ってくださったひとたちにいまいちど感謝申し上げます。

## なかたみつほ／來歴

'84年7月3日、西脇市生まれ、神戸市出身、在住。'04年より詩人・童話作家Ⅱ森忠明に師事。夜間高校卒業後、職業・住居を転々とする。'14年より出版局『a missing person's press』主宰。詩集『38wの紙片』、『世界の果ての駅舎』、短篇集『旅路は美しく、旅人は善良だというのに』ほか。現在、歌誌『帆(han)』を立ち上げ、歌人として活動中。

# 星蝕詠嘆集／Eclipse Arioso 【Scond Edition】

copyright © by Mitzho Nakata / 2004-2019

2023年11月15日・改訂新版発行

著作・編輯・装丁・発行／中田満帆

題名・編輯補助／森 忠明

発行所／a miassing peroson's press

〒651-0092

兵庫県神戸市中央区生田町1-1-13 新神戸マンション北館303号

078-200-6874 / mitzho84@gamail.com

Printed in Japan